

有
名
句
抄

和書門	
二五九六七	類
二九函	架
二册	架

265

内閣文庫	
二五九六七	和書
二九函	架
二册	架

内閣文庫	
番號	和 25967
冊數	2 (1)
函號	202 265

202-265



綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり



才一初何益二庫二日

和學講談所

在七七に花のりき川うん家も本共 絶
せらかきり下もさるをと丸よ口本談つさ
て不るんかひと也教の字乃心かけ花ハ
常住るると才一の教のうた建てて下等
祝しとんまつるあり

美の野山をうけしとくを

昆

年々歳と咲けり花は美の野山をうたれ
しる庭ありんか教の才一は悦ハ祝せし
しり服又野山をうけしとくを 家居人言は
てはあつてか守教の客人服年々才三
ねはと古人のをしと也教のよきかありを

むかしさくらさくらいとしに花をばかきかき
ふししとあまはよとくはしのまをばかきかき
ふとすのおもい離れなれどいひく
ついに友をえしぬおもふれに野山をさるひ
庭の原をみまへしあつたうぢかきけりきの
うらやあつういふや

かきけりいひりりいひりりい
巴

おのれ離れ日のけをばかきかき
巴

むかし月をなれりやまをばかきかき
日

かく捨ね
吐

霧がきりたるも川風の時を
吐

春吹あめ川風もむしるも晴月をばかき

いさぎ

下葉らるる柳をばかきかき
日

春方しきなるにちなるを柳の下葉吹あつたま
日

かきかきかき

きよいひいひり水のころをばかき
巴

あつたさきさきとあつたあつたあつたあつた
巴

かきかきかき

俺ぬまはききとるも葉の根をさきかき
巴

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
巴

山賤のあつたあつたあつたあつたあつた
日

わさ田あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

見たりーかこ乃思のちこの里 叱

みぬ里の思をよむまゝの山つこの日を

家居とも依りへりるを可也

ふけをうき行の林を考おぬく 日

常行のたやれ中よりぬる里の考

おれの行よめりハキよのそりー里と

付らり物さり

いつくよ多れ啼てらるる也

言おしよるまゝをりかこりー

存として行遠近のあさるる日

物まよきよ多のり行を志るる也

まよめりの竹さむす神 叱

あらとあるま多幸のて見物より

うらぬるり行りー

かかるとくよけくもてまぬ 也

救年まつくよむ君よまのいふも

入るき佛の道もつまのあまも 日

常行給仕て妙道よ入るりある也

ありは都をわへりしは也 叱

化城喻也心也佛の前生を道寺行下根

かして中道よるひまゝなるをかりの教をた

て下氣を更すけり終りま実れ室可入

を引行いを道のり来と夕をけり也

みる時やちいあへまき雲の花 日

て武天皇后醍醐天皇もかりたれ都か
るへき終りたれめ乃都をみ成り来るるむへき
と吉野の花より

おやろけあぬ月をありあけ 巴

大いあぬと云んや花よのむと願ふ

と吉野の梢におほくあけ乃月と云哥

れをそあつて

長実ふも霞のふまらそをちまひ 日

のとりとんをけりて解ぬむおまひつら

乃乃はたこみあつたれ

まれの舞り人むさけ舞 此

とあつたのよらつたあつたあつたあつた

朝霧のていまり

梅の月をたさのひまやきけん 日

余なきの氣いよ一は来とひつり入る

まのさつ一は梅の白いけうひつら

おそあはるるあつたあつた 巴

たさ一の志けりあつた細るをあつた

月をたさい山にけ道とて 日

山の陰りの道とてあり是は山にけの道也

細るよ月のくらと里とていあつた

ま川のやう秋のけりあつた 此

山のけりあつた故よ川のやうなまを付侍り

夕霞よ月をたさあつたあつたあつたあつた

一かん

かみ部一汗の汗を過りて又あまき

ふふて昔のれりくある

むむひもあふむを流こなるなり

くられ有

あふ人のあまりもや孝しきん

あふ人の門乃あふ住まきけき乃流し

まいあふぬとせ

あふれ流りけきまける申

あふらふ多まりあふる人あふれ

あふらふりのさしぬとや

高
かりあふりいんわり年をく

あふをせ家小を宿ぬる枕とせ

難面とえさぬたくらゆりまぬく

あふまき人もまかひたは口はを

あふらふあふれゆりあふらふ

あふをけきあふけぬくまを

新アひりよりあふりあふ

あふらふくゆりあふれぬあふえさぬ

あふらふらひりてあふらふあふ

あふらふあふけきあふらふあふ

あふらふあふらふあふらふあふ

あふらふあふらふあふらふあふ

あふらふあふらふあふらふあふ

ををうとして、の院、隨乃人、名をわける
とも、さう、う、人、し、う、を、あ、め、あ、し、い、を、さ、う、う、

夫、く、く、夫、う、後、小、時、を、く、く、く、ひ、ひ、ひ、日

慈明親王、飛山の、ゆ、も、と、院、道、あり、て、克、出、賊

を、作、り、後、よ、其、賊、の、中、に、何、は、余、飛、山、下、柳、上、座、后

欲、解、官、休、身、終、老、於、此、建、草、堂、之、漸、成、為

執、政、者、枉、被、陷、矣、君、臣、日、諛、言、又、于、朝、堂

ト、シ、テ、シ、ラ、シ、タ、リ、前、後、略、也

う、り、水、野、乃、神、や、さ、り、ぬ、る、也 巴

重、廓、の、帰、著、て、天、林、と、成、終、く、ろ、と、也

生、お、一、雲、を、刀、人、く、く、陰、う、く、日

一、夜、去、と、云、く、の、誰、も、知、ぬ、了、神、田、氣、向、の、は、一

衆、の、松、生、く、也

玉、中、く、と、山、紫、れ、つ、き、あ、く、く、也 比

生、お、一、を、葛、よ、ま、あ、り、葛、み、く、く、ぬ、く

あ、ん、物、死、去、よ、葛、任、合

月、残、の、露、よ、涼、一、き、風、わ、せ、く、日

戸、葛、柴、の、垣、不、の、露、ま、を、と、り、く、く、月、を、か

く、さ、き、の、の、り、わ、涼、一、き、風、を、と、り、く、く、

志、く、く、ら、ぬ、の、袖、の、か、く、也 巴

かく、控、ぬ、

我、あ、く、く、又、ま、あ、く、く、ふ、ゆ、く、く、く、日

志、く、く、履、了、席、の、父、中、月、人、あ、る、く、く、也

解、く、く、や、人、乃、せ、ん、く、く、み、ら、く、也 比

あひハ新いよふ一人の又まらふとくしんまき
りううーの心せ付向ハ新ま月人の心ん
たよせん人の中も思人のまらふううーと
をもちひくーと也

学少るまらうーをろつれ程みして 日
これの字のたを流るるまらふか切らえ
きを解らむろらあり

日考修り山ありさあけら 巴
金思ハ考修り山と十ま重らさあけら
とあり金思や伏目底さハまをとて改く
をろらまらうーと也

考をいこむる夢の行乃にうすも 日
考の中は夢の軒れさありらハ考修の
うらあつと也

かひのむもまもまのうけき 日
わらひあり

さらう後尾上の表ハ木のありて 日
尾上のまら乃ひくまも後ららハ橋は
乃かまらうーと也

ゆくそれとまき泊船後 日
はらせのていあり

泉川をまらひけもワらりか 日
うまの君泊船まらてはま外ハ泉川の
後らよはらいては流ハ後らるる後らと也

日をみ川をたすもうけてなり 叱

泉河ふよきふる物もわかき命を

凍き心をまじりてけりばけて

三番

まじりかやうあり

見つめかろ岩れとる申や口をん 日

みつめつる其衣よ岩りてまじりけり中

まじりつるまじりつるまじりつるまじり

ちりれつるあつる其乃屋のなげ 巴

あつるまじりつるまじりつるまじりつる

善ぬれん小回ふ其措の経ありて 日

又かくれま

ふ山あしてやえのかり人 叱

竹をハ敷りありかり人の経よめて針措る

ハハ竹措い川を付ぶく

紅葉ころ父にまじりてちりつる 日

もみちりつるまじりつるまじりつる

敷さむじりつるまじりつるまじりつる 日

まじりつるまじりつるまじりつるまじり

あつ地を敷あり

けつきまじりつるまじりつる 叱

敷つるまじりつるまじりつるまじりつる

名のつるまじりつるまじりつるまじり 日

花乃えんは巻よ敷る月敷の内付は

に保氏この戸口より誰をも志してわかれ
て物名のりり行いふてつきていふまじ
てやまんといふまじと引とあられ一面乳
あらん死

みらねゆくあはる井の庵を 巴

けふいさなれ大將也を井君うつはさよ
後仁初寺威儀仰れはる心あてせてぬ
まじりよ大將殿二条を過りて見付給て
め新つるさ君を車よをまきりしげらる
後しそい川よりりり名宗行をくらり
けんよの給へ三條堀川蚊を焼多へとる也
さくちのまじり行て娘給る一とまめのと

執業位又下大將殿の家礼道成と云合
後いふへらるる宇の迫門にてまじり力を
まけ行へる長門守殿京乃船中へ入る
都へのかりとまじての里にて湯誕生あり
おれぬむむめを多井を屋よりりりり
むも井の君もり也け井は海中二条り
ある湯あり也百里が後ある也
草を毛水をとりんとおりらるて

はるかうひ物に花鳥井ををりり平人
まじりしはまじりみまじりし
名を志の毒はまじり

香よつるれ 弱を毒の下まじり

いづれ

一むらりかっけはちうくきく敷り 日

村のくく火と成らるるまじりの書中を

志のく新なり

かへんまうくもあ〜吹きり 日 巴

地りぬややしむむのたよまけ 日

あうくれ取

みまのまきぬものまけけり 叱

花とち〜むまれ初よまのて花れゆを

さ〜ぬまり

おとろく〜蝶や霞〜るるあまみり 日

初まきぬの胡蝶のあまりよまけけりけり

いり日の多〜もあ草乃はま 日 巴

水おける塩はつ〜ひよ友あまき 日

あうや〜い〜もや

あ〜い〜地も中〜のころあし 叱

友よ地付合也

塩度のたつり多〜しては浦さひ 日

川原の院乃右様あり

君まはて〜少り後〜塩はは浦さひくとあ 日 巴

難波ま〜りれ五月あ〜のころ 日 巴

あうは原のそ〜難波の塩をまり

一か〜い産子回面をさう〜をうて 日

津の玉けあ〜い〜りよ化〜田〜苦〜の 日

日は雑子より

ねむしけ花の香もくさる風さして 日

香へよりくさる香はる花の香也風後より

香へ白いくさる香もくさるねむしけ花の香也 日

香の香もくさる香もくさるの 日

かほの香もくさる香もくさる

真じみくさる乃徳ははの 日

いりの香もくさる香もくさる

法はのひろれ庭もくさるれぬ 日

いりの徳付の香もくさる香もくさる

庭もくさるいりの庭もくさる

いりてくさるいりてくさるいりてくさる

地味赤白代表表火にお見を湯見火園降

余の約まかりて真よくくさるていりまひ後

内見志まかりよこい好くは庭もくさるよは行

ま極ちけ香もくさるいりてくさるいりてくさる

法神御後命け香もくさるいりてくさるいりてくさる

こめ三年まで約まかりていりてくさるいりてくさる

来たりまき法の庭もくさるいりてくさるいりてくさる

ていりてくさる

おもしろく下りてあやういりてくさる

をり白く神代よ米回傳まかりてくさるいりてくさる

在中のあやうくさるいりてくさるいりてくさる

神代くさるいりてくさるいりてくさる

神代くさるいりてくさるいりてくさる

神代くさるいりてくさるいりてくさる

神代くさるいりてくさるいりてくさる

神代くさるいりてくさるいりてくさる

神代くさるいりてくさるいりてくさる

いのもちつたりいんあひせとせつ
又ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふ

かりぬふふふふふふふふふふふふふふふ

月影ふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

結子ゆふふふふふふふふふふふふふ

古つうふふふふふふふふふふふふふ

あき風の吹いてぬふふふふふふふふ

かふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふ

うけおふふふふふふふふふふふふふ

ねつやあふふふふふふふふふふふふ

けきつふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

何とせふふふふふふふふふふふふ

うふふふふふふふふふふふふふふふ

藤く川く径居のなりのまのなり

あひながある里乃りひひ

三句とてなをり句

いふふふふふふふふふふふふふふ

日救きしてつりのあきは里にたてま

隣に從違ふるや付ある奈れよさるや
民けさくも世もさるる事ある日
氏神の奈也弟一の場白よれと祝ふら
物也あるさる世性あり

弟二 何奴

十二日

見てもおもひおぬ人いふ花の屋と 見
右の教のいぬ葉の如きのまに教のいぬ葉
と密通ありて冷泉院とまうけ行は源氏は君
乃生れ給ゆ子をあらまうちよ刀行ひとまうち
中ららけ命婦ミヤウよの給よはは命婦の芥り
見てもおもひおぬ人いふ花の屋と 見
とてふやとけ方の向をとりて延はくくと花を
見ては宵の花をさぬ人いふとらり見物ありと
やしおしん也意難の方をとりて四季乃哥を
誦せとあり

門をあらまわけのこふみち

龜也

門内も雲は雨のそりてかぬまゝよぬ人いづれ
まれば水ゆくて又物を引あぐ

あゆみゆくたき野をみしりあり
ほろこりちうき野をみしりあり

あつらあり
ゆりありは林葉や雪の清かりん

山ありきも野原のふりきり雪の音とて
そこのりかていそあ山あふん

山のたかきりくもまゝさるるあり
まてよくのまは月のかげあり

まふかやのまねもそこのり山かたさるるあり
吹ふちたりか秋のそり風

月の月初秋なりてあり
霧やたれまき草うさるるあり

立用中より秋風吹さらし草葉もさるるあり
まゝるといひありてあり

なくにのりるま垣
かく張あり

高垣のみらふに粒の漬ひきり
さるるまねくさきもさるるあり

下り川まじりたるまねかて岸
前る漬ありあつたのひきり

つぎ店は何なるまね也まき方よりまき也
かきける柳の根さるるあり

門柳又岸柳とあり岩くはま柳の根

あらしをせかくさげ

田面してうりていすきわのいんれ 巴

あつすきかゝる堤の柳乃根ありはま柳也

かつさの柳や葉よはしくらん 日

をりうみり

さきをぬき人のまげら小車 叱

位ききかゝる先をよみまげらや葉よ柳

はくはをよきまげらん

ねらぬかひ人のみらん入て 日

大か通保はこまらかりて道とせやん

るものふり乃まらかりた人の人もまら

あつてのす

ちまらりしやもまららん入 巴

思はれらんて夜更たてらん

なとつせもまらたらんれ秋の月 日

秋文もてまらたらんれ

入るかりらん玉葉 七

よりのまらたらんれ玉葉もあらん

さるるらんれとまらたらんれ書使

は横武の古本もまらたらんれ

統るらんれとまらたらんれ 日

旅りれば秋のまらたらんれ

書使

と秋もさしづめ玉川の山に
日々に衣ううすく野に

巴

秋色ておもさうすくおふゆらさなり
つきりありてじろの青紅よすもは純日

つきりありてまきの子すくこき差あま
男のあてれしれ小野の山しけ

七

夕暮れ巻この也朱雀院女二ま柏木の
右巻ののさ逸柏木よ別内母れ家と

小野よ伝給り多きとあしぬ成行て校の
事ををいひしる地なり

すとう風の焼木さうりつむ道そきて

日

備前

うついでしる名れさぬま

巴

卯花のうきかたはくは咲かぬ

日

支句とある本歌

里のいしづくり玉川ののみこ

叱

卯花よよかんしるハ橋津也玉川ののみこ
花みよとて里のいしづくり

蛙たすけ打てり乃向りの夕暮

日

蛙の志いあまきし夕暮あてみしる里
いしづくりさまり

田中乃みれのとらまのを

巴

よるれ日寸毎よなるえんれ

日

井の田をよちりよるぬれ

野は草のかけきまうなる

叱

ぬね日くぬ草の生成はくまひり

かりのほろ麻をき産やあうらん

日

去来の産をいまきてまう雲産はあめ

風をいませる敷中のみあふの

巴

月より竹の末葉をうりー

日

素わくしてなまかきーしまぬるもや風ー

つまぬるい空り白せ

江りりもや水りうらん

七

江の竹の葉を敷降をさいたる下り水

らうらん

二行

驚くくの段りうー付かへーりよ

日

ぬーけけさうらよせーり方ーり水

なるぬへしぬ付の真をあつまうせし

ぬさーく寸あいはんこまり

ぬーけけのあうらとせるまはれは終く

あうらん

物考のひましく細きうりう

日

すーりら

お花のこまきうの思のみち

叱

尾たみの神まらりあーり

うけりゆく秋さーりやあはらん

日

昔秋まを疎りーらお花也秋を引

つげーら

独り夜寝さめは居のち移りけさ

庭り白く

也

世を捨つる男を月のもとを伴ふびく

女夫休

夕の雲れまみあう形

叱

捨つる男の月とともい夕の雲は緑をう

も後又風雲流水の力をとてうけく

とけのいり粒をまじり染おとしけり

日

枝う移り玉は玉は花よりあつる雲れ粒

みくたのまじりも力も老くそくする事は分

の夕は雲のみあふちのひけり

あゝの霞はまら

也

らうのいれ古のを是のいれの水は女のきり

あつるまじり

松の葉にほり

日

春は花の雲れぬりつとに松より又花

の枝をうけをれ

霧あう霧

叱

春はちりりか里

たつた入霧あうら

芝すまや

早も霞をふりもす

霧あう早も霞の芝生をふりぬすまや

けきり

まわつらんもろき塚のまへ

巴

かくれたる

かもしげいぢやよむじうるをちりて

日

親のほろれあよる砂を叩めるを也

夏はみぢりてはよむのうらむ

叱

とほろくる風乃わろきうら原氏の君はこ

まとうろも移入る夏に桐壺の西門のんじ

行ひ西海系をいそぎ移つるをわりの古事本

流るるもとむるあすけりまゝぬんめばと

よむわくぢむかしく秋の月

日

はるよよあみあみけりなすけりや夏は

なむぢぢむかしくみけりけりあぢらけりうら

ららららら

うらかき連をぬおのきせし

巴

縮くまきそのいふもまぬあせはひ

日

あむくくれまか

うらやむけりてはあぢらかかん

叱

ちりけりあぢらあぢらあぢらあぢらあぢら

うらまぢれし指合のうらまぢれし

よりのうらまぢれしうらまぢれし

そし一ぢあかん

つれはかぢらあぢらあぢらあぢら

日

あぢらあぢらあぢらあぢらあぢらあぢら

あぢらあぢらあぢらあぢらあぢらあぢら

まじりて人をもうき塚のまじ

巴

三句

かくれたな

おしりげいぢやよじうるをちりて

日

親のほつれあはる跡をひめるを也

夏はみぢりたは夏のついで

叱

も海よりる風乃ちうきうく源氏の君はこ

—まとうも移入る夏に桐壺の西門のえし

行ひ内海系をいれきひつるをあり古事本

鏡なりとせむるをあすりりまはれんあはれん

ふもぬくむむかしく秋の月

日

も夏はみぢりたは夏のついで

も海よりる風乃ちうきうく源氏の君はこ

ふもぬくむむかしく秋の月

うかく中をぬるおのきしん

巴

縮くもまきのいふもまきのあせはひ

日

あふくればもか

う—やむけらしてはあちかかん

叱

ちとせかくもあせはひぬりおちおちあな

らもまぢりたは夏のついで

よりの—もあせはひぬりおちおちあな

そし—ぢあふく

つれはちかみのあせはひぬりおちおちあな

日

あせはひぬりおちおちあな

あせはひぬりおちおちあな

なほりともあり 名れ山みら

まひしと城ありひまうたり跡まう

日巴

あることなるも中結し

いく救うきぬおきありの友

叱

お人さんむよへりあるをきぬ人よけが
ある跡の友まひりかん

地れんさく花よかしく昔造

日

いく夜うちまて咲花あつへき也きぬは木
るけあまに起針いく救うきぬあ

あまのころを夜よぬまじ

巴

かこれなり

まはらひらうさるれ喜し

日

ゆいさせる。行の解るるもまはらむる

まや

夕や中りよみ夜おむん

叱

あるからむらなまきよ鞠の場人ある

まれとせさしとせ

かの刃ける約着のへんをとおひ候

日

まうまは巻より夕秀の大樽柏木の右並身を後

引ありて六条院より鞠あり女三まはれこの引

はな少くみよめありよりよひは面敷をかの

て柏木右並身を左のよりむり柳のよりみん

人皆まきり鞠を付ふくまはりけ古事本流又

可作

思ふ所ありればさうかへむ。

ませのうちれまの花くひはが

日巴

よき人と思ふよたをかへるる也

かへるはくきゆる虫は喜

此

ませはうちのま花おつらうくおひな集

かへるくきよきは虫のひらひらひら

うちうちの人乃をさかちうてい

野ふにまじりぬ秋の風

日

あつたはなをよもむふとちかて虫はひら

らうゆきこちうはまやのうのうさ

ひありうの路こ川あり

あはもきゆる月のむし

也

かへるにむしをけ合也

山たきあといはれはけしむき

日

ゆきこちう也

川きさじき流の

此

江いれつ流はきりあはしにんて

ゆきありけるまぬ川きの時也

たうたれ水のわやをりあすん

日

川をいさじきとまはあしりるけ合也

き故多ま人のあはあやをりあすん

とやけり也

まらぬあなまき一人もなま物をまに

娘はあなまきすんまもあ

梅乃木かげやもめる伯敷女

巴

難波女まつせりしよるあふせり紅梅の水よ
うりるを伯敷女に在りしと也立田娘をよの
心あふく

霧しり朝乃ほまつくつりありて

日

伯敷女に任家まふく

わし迷玉らる庭のまき風

比

まきとふまきのまき風よ敷少りおらる也霧の
里村のつまつくつりありしり板屋に朝しりあ
られ乃玉のつりありて庭の面よ乱らる許也
かげらる竹のまきもられ日をうすし
日うすしまきもられ糸氣たらん

秋名にねたわさくふのいろ

巴

例ありぬ力いふはまきみられ髪

日

病者の氣多よとりるせり

ひつとせまらるれを病よあふく

比

昼夜をとりし枕よらりおるおるおれ也あ

うらる休むいふせりひるを枕の露冷し

われきく又寝よおしやげさの月

日

むつとせまらるけさのあをおし又糸の枕

よ様いふし夜は疾をわらふ

はりし中しあの坂の岡

巴

又寝の翌日の詠也

一とをを都の宮の郎と云

日

きのふ時多開きて教よて命也

た作人しり著るるしり花

叱

作人の作人も橋のやうもく人の着よを

つきよつと都ををすりよすりよすり

疾くよひきよあやめも時とて

日

疾くあやめも都とてさし著るりしめ

を成るる今人の橋のさ著るりしめ

かふるあやめもあやめも

也

付少さのきりまなり

うらもいれをを真乃さなり

日

うらもいれをを真乃さなり

水のつらかときよよなり

也

水多しつりまのまて生れも思付ぶくま

うらもいれをを真乃さなり

交わりあやめもあやめも

はまもせし人の我身よさるる

あやめもあやめもあやめも

あやめもあやめもあやめも

うきりたてての白あやめも

日

あやめもあやめもあやめも

あやめもあやめもあやめも

あやめもあやめもあやめも

あやめもあやめもあやめも

夕行よまする又田ぢくて田
秋風れ涼くかよ柳とく

日也

あふ異辭

秀まよひいけかふるよかけ

叱

秋風うよ秀るよ曇る柳也

結いける月の下あすおみく

日

月よ秀る下あすいけかふる柳也

秋風もさかよ涼せまよ

日

なまれ男いぬをよとあす月結おてあ

せをよかふるあかまん也

言えそく後もいけかふる乃秀

日

結いそ涼せ秋もはよとぬと也

野あけいりなちれさきいあ

日

かすまれの音れみけ

かすまれの音れみけ

叱

秋風よさよ木かすれのみち

日

あふ異辭

ちる花をゆく柳よとひまひ

日

くすまのいけに花

日

あふ同あ

第三 何路 十三日

花よ吹風や松木のをのゝをと 巻

花と吹ちく寸風の暮ふさあゝ松木きつるま
のれ若くや花の木のまもみこも成りて也

みどりきりよまのの松木 見

松木よとあつる月松木を付又まきけき天切く
おのこく松の緑ちふて持せらるゝあゝく身

つひさる脚とそんし

朝あくはもつうくとり吾はて 日

毎物ほも里一各又まれよとらほはけつと
るを仕せしとや緑きりよ六吾れ宿よきとよ

吾

名根しひの氷乃一見ち 也

紫とくやくらぬるわとまのすん 日

あふうられま

こたつこまは里乃中川 也

方この里入つて石け故朽る経りのわけ

たよとよ也

かたつこま月たよの道のまろくあまき 日

里は中川の雲を便して園の夜とけしある
道の入り雲とらりなまぬりまをひよりなる

クヤこのをいよとあり

吾も雲井る月見るのは 也

吾も雲井る月見るのはとそ(のまろく)也

走りぬ木寸葉ハわのくさひ
日
すしーのふん

清寸坊まーくふれさるる
叱

栴のふくもてぬ程は晩清冷くすゆる御
日

入ぬる秋の野もまるとけぬれや
日

聖寺の清書とてぬる道なき
日

玉まじりもれ御のあけけき
日

あひ刃ぬもゆりともまけては哀し
日

先程の廊とすてまじりよふ御也
叱

朝をともすも決つる御山
叱

石の巻よまを無若のよりまて冷泉院を
叱

まき位よけあ行んは公きあり
叱

と難叶てハま行路引難行を冷泉院
叱

しり表をかけ行し事わりハまと冷泉院
叱

版の清見也
日

新居や池も志
日

は表撰り居ハ都のよりま心也
日

あささうふもとの秋もさる
日

おのひといまはまを隠るい
日

ゆえぬ表をといま表に
日

あかもまてまぬるハ公き
日

草れまの座よりま
日

け一ハ旅人
日

秋中に旅立人の心中さし長侍一きり
とやいづきいつんとおしんうる也

あはれなる風を袖よけあて
日

秋の柔ぬふ月乃あつた
也

あはれなる風を袖よけあて
日

あはれなる風を袖よけあて
日

あはれなる風を袖よけあて
日

あはれなる風を袖よけあて
日

あはれなる風を袖よけあて
日

あはれなる風を袖よけあて
日

あはれなる風を袖よけあて
日

あはれなる風を袖よけあて
日

あはれなる風を袖よけあて
日

あはれなる風を袖よけあて
日

あはれなる風を袖よけあて
日

二箇

花地りし放たるる奈は露よぬきて 日

花ちりし経は露よぬきてのともみほと也

こ蝶のすくくうら白さひりて 七

夕日れ露よぬきてこ蝶は命り後らる也

虫のこもあはらぬらるのこくく 日

秋のこもふくくそあはらるよ虫は言て後

くやえたる秋也

かきけいあさき秋の草うき 日 也

あおをささきあまきまきえひく 日

あうくねが

まうさひり青月の下り 七

あふんや

乃くけいぬまや礎のけららの喜 日

月の下舞の夏又も見つらぬ筋れつらり

喜俺しあうへいと也

賤うすいあまきなとちりまき 日 也

志つ礎のけららのをくふとよちりあはれ物

をすひりり糸の通乃けららちり 日

ちりてなき物くまのつらちり清ぬ網

玄枕草よみあり

木うけあまきけ志がれ花の 七

けららり乃花をきくそとかなあをす

ひあうとあ六指方けは志がれ山らのつ

らちりく人あてつるあをいん

まゝもむしりぬるはまゝ人

日

ころよえぬ可昔よあつる也思ふ花をこて
古歌をきらひたり

給ふさりしせいなる法師

也

生仏玉と源氏といたる佛とちける後よけり
を見て昔よ海里よりとて

中よこし之と多るみるはの場

日

妙喜院はを定てさよかゝいまる仙と望
みる

のまわらぬせいふ系竹

也

は場は喜樂をやよきとみりし妙あるみき喜
樂のころみりしつる方舞き崖く大樹累那

羅ふ仏前彈指撥琴奏八万四千喜樂大樹
累那陸徑あり

さかとりてうらるゝ大井川

日

兼家入道殿は真院とせ大井河よせし
せよせ終る作文乃真管絃の真しうせ終
てそ通くよあふらる人のせ終る

月のうらるれやうらるけ

也

大井川のま流桂也

まてけをよあふらる風よ

日

けうの月中桂也

山依の霧や時るせりあ

也

あふらる

白朮をぬ染れしはらう路ひて 日

心櫃の紅紫の深浦へて未だその葉ハ露

み多しこの御也善哉

かきひやく入日し 巳

うづろひてハ入日也

をり水もかきふつうは水取り 日

くれば

わづれけふてきや一度よと 叱

池水のかきふ取らるひてはたぬをこれ程

とゆへ一葉ハ残り又少き物とて一度の映

る事しはたぬといひあつハせり

三 さいしよと古きあすはむのい侘 日

葉ひつき故ふまはれをの書を織物

推り少きとて葉をわづれひつら也古倉

古枕長枕哥よあり古針合也

老の後竹くきをもめす 巳

古倉まともしりもあつぬ針也

心く出ぬをいけつあつめ 日

心ハも家まきしとををりて四毫ハ位也

をひうされては在をいけくま 叱

伊勢物語ハ俄ハ女をひうつ了融カ文撰

留賦於是施長遠子云可妻離友トリ遠子ハ

伸遂もたん者ツ云下町あつハそ力も家せぬ也

心ハ歌をせしりハこれ作意也付句ハ心を久心也

家をとくまきしんれんをまひらひつらん
しり家を出つたしんれんをまひらひつらん
つまとうまきしんれん

むらおもやるとはるまきしんれん

まひらひつらんむらおもやるとはるまきしんれん
猿人もいへまきしんれん
とくまきしんれん畜生の心申さんれん

吾心うほふまきしんれん

吾心うほふまきしんれん

まきしんれん乃家出つたしんれん

まきしんれん乃家出つたしんれん
まきしんれん乃家出つたしんれん

吾れ人のまきしんれん

まきしんれん乃家出つたしんれん
まきしんれん乃家出つたしんれん

まきしんれん乃家出つたしんれん

まきしんれん乃家出つたしんれん
まきしんれん乃家出つたしんれん

苗代水は月かのみなり

苗代水は月かのみなり
苗代水は月かのみなり

苗代水は月かのみなり

苗代水は月かのみなり
苗代水は月かのみなり

苗代水は月かのみなり

夏草は中よ梅のさしり花 日

ふる事多ふめはる落さそゆりこがはる夏
しりあふくき花

こころくのあそ子花な 日

針さくして今正儀拾句みり

手ぬえあふりこはあまこえぬひらて 日

みて子花多のまぬや

ひきくよまびおもりおしひ子 日

ぬひらてとあるよ次牙くおもひまあん花

手ぬえのしほきのよふし憐愍あふく

ゆえまて門むらくるはう山 日

源氏のあひすくは源氏はあひすくあま

くゆらちら新を源氏の君うこよを門

ひらけ新あめとむせらふのや平公を門

乃古事平ゆへみり

たて一車りまればみりあふ 日

門あま落して車るのよまを

さうの山陽牽のあとい言なめて 日

ゆらちらちや

うけいやすう人言のぬるみら 日

ふ代の方道の内牽は紐着て言はうら

見の人とあ一の記乃言せり 日

是の方及を遊生の道は付あ結りる人

あぬはけいり花のちるをせおま

さまう産者よき遠生は遠くつる月入也

朽木の梅をよむひしよくまわ 巴

くくれみ

まれぬくしよの岸をぬき 日

梅の水をよめる物や水を朽木と也

新田は川乃すよをぬきまわ 七

あひまわり

山は舟体状のめくあ晴屋を 日

あまきよそよはのひららるぬくまわ

けむきうたなるよひめいあつた 巴

殊のるあひさよ月乃婿居し 日

あひまわり

うよあしうらうの軒の下 七

あひらうあつさよかろなく軒は

義のそよまじり涼く成る也

うらうあしあもも麻の袖の露 日

飛のうらう軒の義乃たよき入交毎又人

うらうあしあもも麻の袖の露

あしあしあもも麻の袖の露 巴

麻のうらうあもも麻の袖の露

あしあしあもも麻の袖の露 日

あしあしあもも麻の袖の露

あしあしあもも麻の袖の露 七

あしあしあもも麻の袖の露

わくくと吹く風の中ねん霧よ又月の
をとりしるあり

はうききらりええそぬ首乃紫
古^クりげんたさしむ^ハ往事ありきん 日也

あふ屋の句也

をこまひもくをまあうしきとり 日

七月十^ナ六^ハの^ハち^ハの^ハれ^ハの^ハり^ハ也

くまくとうきする日殺れ其くれく 此

一夏九旬の日は自恣日と云也この句が

しき中しにせしめしんか中かたのちのちのち

乃室を往しあとのくううし引きあはせしる也

くうみりきのわとみ川さし 日

けりやれとうきする月はうへんあふくも

みまきらあか葉乃川風をくうん 也

やうくうらふや

花の家より片思の毒 日

葉葉の名所也花葉をみまきらうし也

叶多ゆくのまよをくうきして 此

子規一羽の著信一は花のちかふ面白也

都を都まつがとが思れまよの

うすむ席り乃るれはきく 日

ほよあよんす

まき故ちけ付たりぬまふ人のまき少くはまき
浪れ言や秋の付るを秋のまき

付るはたれはあさき也
うらひひらあは下牛

まき言よ付るはりよれと水の下まを
まよあうくまきり花のあうまきて秋れ季
とても多ある物也

刃さくも花れ技あしとあき
あきしはあうれは下まを付ふく
の下あうはんやまきみさく花咲ひさく
向水の下まも花のまよ月夜ひらる也
あきしはあきり

二面

浪れ言や秋の付るを秋のまき
あまあう山のあひの夕日かけ

あうくくれま
高きあかりやあしかりけく

あまあう山はあひの夕日かけ
あまあう山はあひの夕日かけ

あまあう山はあひの夕日かけ
あまあう山はあひの夕日かけ

あまあう山はあひの夕日かけ
あまあう山はあひの夕日かけ

あまあう山はあひの夕日かけ
あまあう山はあひの夕日かけ

さうして後らるるもへひまゝらるるまゝ道からよ
何としてさしぬ境へまゝに徑里々々也

河鶴も水くればよなる波あはて
日

は鶴の脱け河牛こりおめて里の乃宿ある柳
させる柳の枝を志ししぬ
巴

あうくれはまげしき也

若れ田の宿り乃道をわらひま
日

ゆしゝるる也

雉子たきまゝらるる也
叱

みにしもあるまきやうおてまゝり
日

秀しむのりおせれ税おきせ
日

つとせれ雉子勿漏也

原よるやしれあはらるる也
日

涼も毛やうまゝり
日

あうくれま

秋ありらるる秋の松風
叱

春風の音し秋りも涼し
ひ

をうまはら也

日くしれあはらるる也
日

朝あり日くしれあはらるる也
日

らりし松風もあはらるる也

人あこめやとあしひけし
巴

右付合也あはらるる也
日

夕暮はあはらるる也

花のめまゝなるまゝをてあぬれ日影も
刀をよらぬわまらきこれ神の志あり又花の
白ひれとほりくらにほまゝ花の香ひめ
るまゝの神といひまゝなり

昔あともけてくへるをアアみち

はの神はくらゝ岩屋より籠り

あふくれば

まほまゝの月のまゝなり

は神は岩の内よこの月まゝなり

ちりまゝなり

琴は音も秋のまゝなり

まゝの秋の律もまゝなり

まゝの月もまゝなり

まゝなり

音もまゝなり

源氏わけまゝの巻もまゝなり

まゝなり

まゝなり

まゝなり

まゝなり

まゝなり

まゝなり

まゝなり

まゝなり

三

あつしとては後松原と見え又とてははなれし
苗のうゝ後松原と見えとてははなれし
とてははなれし

しりしをりしりしとてははなれし

日れ後松原と見えとてははなれし

あつしとてははなれし

冬いまりきの山あさきいけ

新橋の行い文をえきし見たりとてははなれし

山あさきいけと見えとてははなれし

あつしとてははなれし

元依いしと見えとてははなれし

山あさきいけと見えとてははなれし

あつしとてははなれし

夜さしと見えとてははなれし

あつしとてははなれし

あつしとてははなれし

口まのせと見えとてははなれし

自他あさきいけと見えとてははなれし

月をえと見えとてははなれし

あつしとてははなれし

あつしとてははなれし

あつしとてははなれし

あつしとてははなれし

あつしとてははなれし

巴

あつよ付のひより終句あり

まじりては作らるるにこのもく

日

おとろへの部がよりいんまの部まよ奥山
位へんをよかんとせ

あれおろしうくまかたて

日

けお衣服をよめしよかきおて織らる
よ真まのくあまき奥山位か衣よてを
くまをよかんとせ

たのき人よきよあまりよ世終て

日

け付やう服をよめしよかき人のまを
まよあまりの余服をよせよまのまを
持らるあかたよかんとせ一回のまをよめ

良答宗貞保多し此の崩御をきしひ家

せしきて言れぬよしよしきよせし

よめしも服をよめしよかんとせ

佛のみちをよめしよかんとせ

日

あく保らるちよもよん守終のよ

清吉也又よいんまをよかんとせ

日

金安年山の跡勅せし時大地よまよんき

よまよめしよかんとせ

まよあまのよあまの月

日

いつかやれ八月の夕方陽の月け白妙

花のさくられ

あつ日よしよかんとせ

日

暮れ家くる鷹友まらひて三井所
乃うんかて家也人の所を帰るはまて
殺がまらしてえうつるをうたなる

あははらりしむらぬのま 巴

ひらふらふりや付かひらるるをうた

遠山のまは音けよふりてまら 日

すくくくくく

冬にむらする里のまら 叱

つぎおらひのねのまら 日

たのやむら乃萬也自まら 巴

かれのころハ事也あせいかいあらるる也

何人のねハ清らる秋のまら 日

まらむらに暮れかめくをぬを人ら也

勢にあらおやをばら 叱

ほよちよんせ

鳥らりタのむら乃啼して 日

撰虫み一年中約まのま合也まらるる也

まをまらにむらひていれあら 巴

まらむらに借いむら虫れむ後らるる也

名 枿香らるるむらむらむらむらむらむら 日

枿香らるるむらむらむらむらむらむら

まらにむらむらむらむらむらむら 叱

乗き人いむらむらむらむらむらむらむら

まらむらむらむらむらむらむらむら

ねまをさしひきしせびくるまきりつらう人
びるちりらりーとむとんふよあき月おひび
つひと又きんりの人日ときげく成らうら
ぬよとらるーとれ井の水 叱
遊生と成らる程よも名水あきけは汲んか
かくーとららむとれをさか今とむのぬ
ーらあひくかた

あつてくひんおとす日のあしんわく
むーらりたのあなまの井の水よし
のやたふた月一のうらた新うら
本はあ乃秋のてんをるる
行とてちつるあるのあむとてはあひらうらひぬん

うらあちまきまの秋のひらのう作也
ちり栗れ疎りもむう標のあ
あひのあひらひはくして又標の粟を来也

あつてくひんおとす日のあしんわく 叱
はまのりあから粟人の程よむ標也
解ちもけーまじあはくあかんて

吹きしとむまおーれをよ
けーらち

うらあちまきまの秋のひらのう作也
ひらあみらぬくたむむあひ
あむあひら

ふんませる 野をめさる 野を遠く

春のまを鳥のよりある

いづくやまを思ふの地 日

花のある乃らあや

地りある花はむらひのきりたる也 日

片思れむひの花はいづくも片思れむ

乃きりしとよあり

るよりきりかの柳さよれ 日

美阿

舟五 一字踏題 十日

隻れ日也むし人は水のみまらる 日

みまらるるもくも也 隻れ日の水をむし

んはて涼きん也

うき藤花さくきりけ行たる 日

藤れ花りきりるがかりも水を流しけ

は物暑もつとれん也

夕も暑も流よむし梅ちりて 日

浮藤よ梅れ花のさるいさある藤よ花

乃咲くさくや 白行藤梅浮目水

美れさく火のさるぬは 日

苗中よ梅のさるさる葉とるり也

清のころもやあはれうらみ人

日

けきつりのみくらの音なきあまらうをわらふ
入むるは月をかり明

此

まはるの音の月をかり
かたはたあはれおのれにさしはる

日

まはるの音の月をかり
まはるの音の月をかり

日

まはるの音の月をかり
まはるの音の月をかり

日

田舎れは乃みちみくも

此

かたはれおのれにさしはる
くろれ音のくせ

まはるの音の月をかり

日

任人のまは道みくも
音のひらく人のあはれ

日

音のひらく人のあはれ
音のひらく人のあはれ

日

音のひらく人のあはれ
音のひらく人のあはれ

日

音のひらく人のあはれ
音のひらく人のあはれ

日

音のひらく人のあはれ
音のひらく人のあはれ

日

音のひらく人のあはれ

日

川筋よかよひ 道中まゝに
まてし句也 巴

わいあつた寝後のあもさきまゝに
帯よ思ひ入一たもきとらぬ寝あけ
まゝぬゆいひまり 日

夜うきあつこの床に寝あけさ
わさ人の寝あきさうけをきてこまに床
夜ぬらうと寝あけのまや 叱

さじろれおとや月のかつらん
敷ぬらうたふ床かおのこけとらて月
もまわらあさるまや 日

野分のあつれけさるあけの
巴

野分の紅くはあつたまゝに

とく紫れぬ紫よまじり花あちて 日

花をくそまじりあやあつたまゝに

病紫あれぬ紫也とくまじりあつたまゝに

うらよコウライ遊ユウ遊ユウまじりあつたまゝに

あつたまゝに

むらあつたまゝに山の下みら 叱

首交代柳也

をとりをもちおてゆく紫の言あり 日

あつたまゝに

寝よあつたまゝに又みられよ 巴

蝶のなまじり言殊りあつたまゝに

あ草は中へ枯へハなよめきて

昔よよ去年はのまのたよめくかしろき
て又みよれとて也

去年入つる野のすきいづも

あまは中より中へいよ年のたよ也

あう事のきは兼て打たまきすれ程におも
う寸雪あさげれくよれくらん

去年は雪のきよより中へ雪路かうとて也

あき降くう寸雪あうく

あよ日影のたろくをらん山
をひ風よりうひてせう海士おま

みよれり常き也

あけほもはあハむろき海つ

大海へ出る物也

あ月よよ田中は水のたあめい

あつひより

あれ想さへハれとて也

あれをて田中は草をていんしん

いけりり右めり壁乃こちり

くれあ月を比はの月れあよて壁よ

あまはまて確土樹果より中へ石生と也

あをまきよりあなりあ也

あれ孔子也為宮徳は方文倫純にかつの子

月うつるひちをまよるは福あり居て

残しをきりたるをよみおし一垂て腕をまろ
しむりたる也

をすむ木ころりの秋乃月く
樵まひらを花やて道のかへりむゆり御之
らとよみもきりたるをよみ乃後一垂
かろれま

水のおもて乃とけき川と
わらハまり

花さけたる山のまろもはさして
花は波よは波はきよめて何とひらく
松は木より木の若れりたる也
山のまろもは波はきよめて何とひらく

まろとたるをきりたる郭と

若れりたるをきりたる也
みまもまつりたるをきりたる也

後成陰は祭のころさし何をもてて雅実
一是少少へとおろされ 事を継ぎあり
天曆八年始てまつりあり

是日野やめはなふる神刀して
八幡のまつりを是日祭よみあり
春日まつり三月八幡三月也是日祭ハ
清和天皇御付しり也
うち所身つてもいらく里人
是日ハ里人あり

く月をいふるをみせればの岩つらひ 日

崩しらの葉を又うらうらうとせ

もみらせれて水うみふきつ 七

名流川集せの波うきふあつおまもりうし

秋文の葉れらむきつらん 日

あゝ山のけむははた井戸は紅葉せう折らう

月のあゝたの雲にうらうら 巴

おらあまきと人のちもみかた

いづれはゆむもきつあ草まら 日

あゝうらうら

うらうらこれ夏後あゝらん 七

いづれはゆむのちのうらけり秋の葉

三番

あゝと都よりうらうらと秋ひらうらあり

あゝとあゝの身ハ秋とちとわす日

丸遷のちさうとまきうつとちとち布志

らやさきと入の道は秋はぬる道なまさとあ

流介と面をせらハ秋とちわもわす日

流介は面乃おとけとせり

世はぬがく思ふおとひの年をく 日

そのおのひはおとろへらうらあきし

くををのちおとけあきす 七

等車は秋ありとち思ふあゝいせゆて

ふあう人をあゝいけうらあきす

あつはきてよこたは梅也

むろひはる船の落葉をうきし来日

お茶のよは柏木は若生舞女このまじり

あつはるはあめは雨にまはりけりしと

舞てもろつる落葉をあつむろひはんと

女このまへをうくる事な梅也

あつをよきとをすし

お茶ををろりうたうるお茶仙人をうたう

あつはるしうきし来破をうらむ

あつはるしうきし来破をうらむ

あつはるしうきし来破をうらむ

あつはるしうきし来破をうらむ

あつはるしうきし来破をうらむ

あつはるしうきし来破をうらむ

あつはるしうきし来破をうらむ

あつはるしうきし来破をうらむ

あつはるしうきし来破をうらむ

あつはるしうきし来破をうらむ

あつはるしうきし来破をうらむ

あつはるしうきし来破をうらむ

あつはるしうきし来破をうらむ

わらぬ川橋花の香に口あせ

跡の上はあさきも水乃ぬみとり日

跡の上は浅きとりのよきあせり未あき

る河橋ささくしてこそ未を尋ねる心ある

香とれぬるあこれ

香に喜ぶ心あり

ゆゑぬれ月乃下風きしくた日

香れぬりよる風はよかりぬゆ

ぬる人走るよきあせ心なきとせぬ日

月の下野にききくまにゆるおる人のあはれ

そはよるまらぬ夏はむしをき日

もう夏はむしをきく少くぬる人をきく

せとれたるよーけらら乃倦さ七

産かぬ森の枕をしらべらるいとをき

らて夏もむしをきくよるせ

書さしぬ蚊をけらりくゆ日

せは手柄の内れ蚊をけらり倦さる

きらぬ涼とぬる道のへきぬ日

蚊き火のあかりにいとあせ

あえぬくも蚊をけらりあす日

坂あけぬくも蚊をけらりあすみる所也

開のを川よる草のあり

坂お坂也開のを川よる水をきかひをきく

うとまふとあるまじはひの教人 日
都人の名をききても 統の道は孤て
日都人をきりきる也

哥のえくひい入るまのなる 也

かゝる申れ哥も撰集に入ぬまは教人感
とまり

名ハ後の世まけも残るもの 日

あゆ千句一軒付あましくて西の方くし
事あまひとハ見物所る月 也

名月とハ雅人の見物て未代中へ残る名は
てあるまじ也

雲芳れをくくは山もあつたれて 日

いづくふつこひの月をくくく 也

の山も名をせやのうん

けつたる唐れおをせちらく 也

小倉は鷹よあり

泊みしつありしも真は岐 日

屋り夕也

ううのまゆをいさうあなちら 也

崗の紅を屋よ勢ありし泊みしこま 也

真の成てともやとみくつる也

芦の葉もねなまう川む高橋て 日

信をれきる人さ松も芦もともあふ
かいま也

おても志んくうもまき目打さ
志の先乃雲ハぬりよ引のさ
あむくくれあ
日巴

兼半のあ〜や言根吹あは
あまの嵐だゆらまき兼小ゆ〜のさ
〜
日巴

くえ〜ぬ宿々〜久行むる鳥
〜
日巴

く〜しは行よすの啼とれ
〜
日巴

羽ハ里らの跡取戻也
〜
日巴

不〜さける編染ハ賤う門の前
いま雀といひあ〜
日巴

吾乃とりく〜日ハさやうあり
〜
日巴

何者や〜はぬ〜ぬ秋のる
〜
日巴

吾乃れ何な〜さあ〜るな〜
〜
日巴

あ〜ま〜乃ぬ〜そ〜の〜
〜
日巴

舟中の花川な〜お〜ぬ〜
〜
日巴

あ〜書あや初な〜お〜
〜
日巴

〜
〜
日巴

花をとりしおの人のうくれおの折をとりて
力を捨たりけりあれよと候ぬえあるに
まじひとらりたをとりたる山
捨力は人をとりたるまじひ候とて
生匠送りあり首陽山よりとり伯
夷神跡をおとす

